東方嘘吐記

ららららら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方嘘吐記

【Ｎコード】
Ｎ１８７９Ｚ

【作者名】
ららららら

【あらすじ】
幻想入りした嘘吐きの少年が能力を使ったり、フラグを建てたりもしながら生き抜いていくお話であり、真と嘘が交差し複雑に絡み合う物語でもあります。オリ主・ハーレム・最強成分が嫌いな方はお戻りください。

プロローグ（前書き）

東方娯楽記の新しいバージョン。

プロローグ

この物語は嘘と真に満ち溢れた物語だ。

ぐるぐる無意味に無意識に回る世界と同じく――ただただ無意味に無意識に嘘を吐く少年が主人公の物語だ。

――死を望み生を放棄した、そんな馬鹿みたいな嘘吐きの物語だ。

――人生を棒に振るった、そんな馬鹿みたいな少年の物語だ。

――他人に本音を決して見せない、そんな馬鹿で孤独な少年の物語だ。

――決して幸せになる事がない、そんな馬鹿で不幸せの少年の物語だ。

さあさ――死を望むが故に幻想郷に堕ちてしまった、そんな馬鹿で孤独で不幸な嘘吐きの少年の物語は、今始まる。

☆　★　☆　★　☆　★　☆
★　☆　★　☆　★　☆　★

「……いやさ、紫さん。アンタなら分かると思うけど、俺をこんな幸せな世界に案内したら――幻想郷が崩れるぜ？」

手をひらひらと回しながら、目の前の紫さんに向かって言い放つ。机一つを挟んだ先に居る紫さんは、しばし悩むような仕草を妖しい気配を出しながら行っていた。――何を考えているのか、読む事が出来ない。

まったくもって、面倒な輩である。ふぅと息を吐きながら横を向

くと、この世界――幻想郷――の景色が一望出来た。天井へ向かっていくであろう太陽と、白い汚れのない海のような青空に照らされた幻想郷の景色は、少なくても俺の語彙力じゃ言い表せない。

「――まあ、そうですわね。貴方が帰りたいのなら、記憶を消して帰してあげる事も可能ですわ」

声が聞こえ、紫さんの方を振り向いた。紫色の露出が色々と多い服を着込んで妖艶さを醸し出しながら、扇子の奥でにやにやと笑っているのがお見通しだった。嫌な趣味してやがる。ぺろりと乾き始めた唇を舐め、生唾を飲み込んだ。

じわじわと湿ってきた手汗は――きっと紫さんが見えない威圧をしているせいなのだろう。けれどそれは憶測でしかなくて、推論とも推理とも言い難い。結局の所――どちらにせよ俺は喋る事しか出来ない。

「……嫌な性格してますね、随分と。大嫌いになっちゃいますよ？」

へらへらと口の端を歪めながらそう言うと、紫さんは扇子を口へ持っていった。

――そして胡散臭い笑みを浮かべた。

「あら、それは困りますね。私は貴方に好意を寄せているというのに」

――どこまでも人を馬鹿にしている奴だ。湧き上がり始めた怒気を口元で押しとどめる。俺を連れてきた張本人なら――俺が戻りたくない事位、分かるだろう。千年以上を生きた妖怪だと言うのなら――尚更分かるはずだ。

それなのに――選択肢を与えてきやがった。ぎりと、歯軋りをす

る。そして、込み上げるナニカを抑える為に息をすぅっと吸っていく。

「……そいつは随分と、好かれているようですね俺は。それで、まあ、そうですね――俺は帰りたくなど無い」

言い放った。紫さんの目が細められる。そして試すような視線が向けてきた。――それを水のようにのらりくらりとかわす事も可能だったが――逆に目を見開いてじっと瞳を覗き込むように見てやった。

――にこりと、紫さんがそこで柔らかい笑みを見せた。

「それならばそれで良いじゃないですか。私は貴方が幻想郷に来る事を望みますわ」

――言い切りやがった。紫さんならば――知っているというのに。決して知らないという訳は無いのに――言い切りやがった。ぐっと拳を握り締めた。

そして口を開き――声帯を振るわせた。

「――言うじゃねえか、管理人さん。つまりアンタは俺がこの世界で幸せを感じても良いと――そう言ってるんだな？　そんな馬鹿みたいな虚言とも言えない妄言を――吐いてるわけだな？」

自分でも驚く程低い声が怒気と共に発散された。

けれど紫さんは、それでも紫さんは――眉の一つさえ動かさなかった。挙句の果てにはくすりと笑い始める。ぐつぐつと、腹の中に溜まったマグマが口元まで押してきた。唾を飲み込んでも堪えきれない。息を吸っても耐えられない――怒りが、視界を染め始める。ちかちかとした光の点滅が視界の中で起きる。

――でも、堪える。

ここで怒ったとして、何の意味がある？　そんな事は嘘吐きのする事じゃあ、決してない。

今は辛抱強く待つだけだ。大丈夫、糞みたいな研究員よりはマシだ。話も通じる。大丈夫。説得すればいい。

「あら、お怒りにならないでください。そんな声――似合いませんよ？」

言われた瞬間――怒気が失せた。ふっと、一瞬で凍ったように、胸元から退いた。

――これはあからさまな挑発だ。今の試すような声の音色で分かった。この女は――紫さんは、俺を試している。ここでどんな行動を取るか――試している。

まったくもって、やはり本当に、嫌な女性だ。魅惑的なまでに美しく、妖怪と言われても決して信じない程だというのに――残念、けれど性格が妖怪である。

さながら、逞しくも美しい太陽が――人類を全滅させる事が出来るように。

さながら、清らかも繊細な大地が――いつでも何かを破壊可能なように。

さながら、優しくも安らげる空が――全てから光を奪う事は出来るように。

「残酷ですねぇ、紫さん。アンタは、残酷だ。俺みたいな人間――どうとでも思っちゃいないんでしょう？　どうせそこら辺に転がる石と同じように――いや、砂と同じようにしか思っちゃいないんでしょう？　分かりますよ、節々からそれが感じれる。残酷なオーラ。

まるで頭が悪いからこそ可愛い害虫を、殺虫剤で追い詰めてるような――そんな、そんなオーラが滲み出てますよ。末恐ろしいオーラだ。本当に、怖い怖い。お陰で喉がからっからで手汗も尋常じゃなくて、挙句の果てには頭でどうすれば生きれるかシュミレーションしちゃう位です。本当――困るなあ」

饒舌に――語りだした。舌が思うように動き、次から次に言葉が溢れ出てくる。だからこそにやにやとした笑みを浮かべながら――言う。小馬鹿にしたような笑みで紫さんを見つめながら。すると、ぴくりと紫さんの眉が動いた。

――ざまあみやがれ。仮面が取れてきたな。

「あ、そうそう。何でしたっけ？　紫さんの能力。境界を操る程度の能力？　でしたっけか？　それで俺の不幸と幸せの境界を弄るとか――後々アンタしそうですよね。人体実験とか止めてくださいよ？　人一人の命、そんな軽く無いんですから。殺人犯だろうと、重いんですから」

どうせ――もうしたのだろう。自身の好奇心を生める為だけに、俺の不幸と幸せの境界を弄くったはずだ。けど――けれど、その位で俺に掛かった呪いが解けるというのなら、俺は苦労しないのだ。

いくら幸せな事を不幸せと感じたって、いくら不幸せな事を幸せだと感じたって――それで呪いは解けない。

だから――。

「そうそう、俺実は今――とっても幸せですよ」

にこりと、笑ってやった。

弄くれるものなら弄くってみろ。俺は悪いがそんなに甘くなど無

い。
そして――最後の一言目を言おうとした瞬間に、背後の襖が開く音が響いた。――瞬間、紫さんの怒気と殺意が消え去った。ふっと気が軽くなる。成る程――確か、霊夢さんだっけか。何ともバッドタイミングだ。

「あ、もしかしてタイミング悪かったかしら？」

「――そんな事無いわ。ね、そうでしょう名無しさん」

空気を読めと、紫さんの目が訴えかけていた。成る程、霊夢さんが居る状況でこれ以上の進展はしたくないと――そういう事か。
はてさて――一体紫さんは、俺を誰だと思っているのだろうか。俺をどんな人間だと思っているのだろうか？　どんな性格だと、認識しているんだろうか？
――悪いが俺は、自己中心的な性格なもんで。

「すいません霊夢さん、とてつもなくバッドなタイミングです。でも今更なんで――じゃ、紫さん、続けましょうよ――腹の探りあい」

――にやりと笑って見せると、紫さんの顔が苦笑いへと変わった。
腹の探りあいという名の――一方的展開のゲーム、それを始めようじゃないか。

悪いが――千年生きようと一万年生きようと、俺に心理戦で勝てはしない。
――本音なんて、すぐに壊せる。それが、俺なのだから。

「おや、試してやるって言ったのは紫さんじゃないですか。どうしてそんな――嫌そうな顔するんですか？　あれ、何で驚いてるんです？　まるで何かまずい事を的中されたような感じですね、紫さん」

後ろの霊夢さんは、黙ったままだった。沈黙が広がっていた。何が起こっているのか――きっと理解したのだろう。賢い。

そう――これは一方的展開の心理戦だ。本音を隠せる千年妖怪と、本音を壊せる十六歳の嘘吐きの――心理戦。勝利も敗北も無ければ、感動も笑いも無いような――心理戦。勝ちの基準など無く、負けの基準も無い。

ただの自己満足な心理戦。

けれど時に自己満足は残酷な結果を招き入れる事になる。

「で――言いますけどね、紫さん。俺はここに居ていい人間じゃないんだ。俺をここに招き入れる――その好意とも呼べる行為は、けれど全てに残酷な結果を招き入れる事になる。この世界の管理人とはとても思えないような行動でしかない。考えてもみてください。こんな優しい人達で溢れる世界に俺を置いたら――俺は幸せになってしまう。そうなれば俺は優しい人達を殺す事になり――そして俺は悲しむ事になる。最悪のバッドエンドになっちまう」

そこで一旦区切りを入れた。

聞こえるのは、三人の呼吸だけ。

「で貴方が俺相手に実験的な事をしようとしても――それは俺に恨みを買う事になる。悪いけど俺は恨む人間は徹底的に恨むんだ。だから、止めた方がいいし――何よりもそれは無駄な実験だ。

――だから紫さん。貴方は何も言わず、何も聞かず、ただ機械的に俺の記憶を削除して元の世界に戻してくれればいい。悪いけど俺

は自分の口から戻してなんて言わない。だから――とっととそうしてくれ」

――瞬間、視界が真っ白に染まり、気がついたら背中に凄まじい衝撃を受けていた。ちかちかと点滅をする視界が、紫さんに吹き飛ばされた事を知らせた。どうやら襖の間から吹き飛んで、そのまま境内の地面まで吹き飛ばされたらしい。

ぐっと全身に力を込めて立ち上がった。頭の中がくらくらするという事は、顎を叩かれたのだろうか。膝から力が抜けるように出て行く。血の滲む口の中で唾液を生み出し、血と共にガムを捨てるように吐き捨てた。びりびりと頬が痛んでくる。成る程、平手か。地味に効く技を繰り出してくるじゃねえか。

「……で、それだけな訳ねえだろ？」

――追撃が来なかった。

けれど紫さんが裸足がこちらへゆっくりと向かってくる。……殺す、つもりだ。多分、きっと、俺を殺すつもりなのだろう。どうやらそこまで俺の事が嫌いらしい。

でも――死ぬというのは中々、良いかもしれない。

「……貴方は」

紫さんが呟いた。必中であり必殺である一撃が――来るだろう。

身体を強張らせた瞬間――身体が包まれた。思考が止まった。……抱かれている。包まれている。誰に？　紫さんに。脳味噌が解凍を始めた。ぐるぐる世界のように回る脳味噌。

「何、してるんですか」

「――抱えすぎよ、何もかもを。駄目ね、悪いけど気が変わったの。貴方は幻想郷に縛り付けるわ」

「馬鹿なんですか、貴方は？」

「十六歳で抱えすぎた貴方の方が馬鹿よ。そんな業――どうして誰にも話さず居れたのか不思議ね」

「だって不利じゃないですか、色々と」

「……とにかく、貴方はここに住みなさい。貴方の呪いは、私がどうにかするわ」

「……惚れちゃいますよ、俺」

「あら。私はとっくに惚れてるわよ」

「よく言いますね、美少女さん」

「貴方もね、イケメンくん」

プロローグ（後書き）

今回の話のテーマは『自己満足』です。

紫さんの助けるという『自己満足』。

主人公の逃げるという『自己満足』。

それらの自己満足は果たしてどんな展開を呼ぶのか――。

そんなお話。

一話　嘘吐きと正直者な鬼（前書き）

とにかくキャラを出し、展開を早めます。

一話　嘘吐きと正直者な鬼

――窓から差し込んだ朝日が閉じている瞼にクリーンヒットし、気がついたら目が覚めていたようだ。研究室のコンクリートと違う畳の香りと、体温で暖かくなった布団。……幻想郷と呼ばれる未知なる世界に――そういえば俺は来たのだった。

見慣れない天井にふと視線を這わせながら、朝日の明るさから今がかなり早い時間帯なのだと理解した。

「……頭いてぇ。二日酔いかよ」

かなり意識がはっきりしてきた所で、気だるさと頭痛が襲ってきた。同時に胸の中がむかむかとしてくる。未成年なのに飲んでしまった酒の味が、じわりと胃の中から込み上げてきそうだった。まるで血が滲むかのような熱さ。火で炙られているようだった。

昨日は何が何だか分からないうちに酒を呑まされていた。確か紫さん、霊夢さんと魔理沙さんと俺の四人だったような気がする。はっきり言って記憶さえ朧気な位に呑まされた。いや、呑まれたという表現の方が正しい気もするが。

「……で、どうして布団がこんなに盛り上がっているのか俺は疑問で疑問でたまらない訳ですよ。だから、ちょっと布団の中に潜り込んでいる紫さんに聞きたいんだけど、どうしてアンタはそこに居る」

ばさりと布団を持ち上げると、下半身にしがみ付いている紫さんが居た。そして紫さんの重そうな瞼が、ぴくぴくと動いてから持ち上がった。声に反応したのだろうか。てかさっさと起きろや。

「おはようございます紫さん。さっさと退け」

今だぼんやりとしている紫さんにそう投げかけて頭をぺちんと叩く。変な帽子が被られていない、高級品の絹のような金髪の感触が手の平に残った。同時に紫さんがむぅと唸った。
次の瞬間、更に力を込めて抱きついてきた。

「……何してんですかアンタは」

「ねえ、名無し君。普通、私みたいな美少女が布団の中で下半身に抱きついていたら、それなりの反応を見せると思うのよね。それに朝元気だから不全って訳じゃないでしょう？　欲情はしないのかしら」

「何危ない事言ってるんですかアンタ。いやだって考えてみてくださいよ。悪いけどアンタは俺を片腕……いや、指一本で粉砕できるでしょう？　襲って殺される位なら襲いませんよ」

案外真面目な話だ。境界を操る程度の能力だかで、生死の境を操られたら死亡なのだ。いや、まあ、さすがにそこまでは出来ないだろうけれど――とにかく、その他諸々、空気だとか体温だかの境界を操られただけで、俺は死んでしまう。
文字通り、指一本で。

「あなたねぇ……こんな状況だったら私が誘ってるでしょ？」

「鈍いもんで」

両手を肩の上でひらひらと回しながら、そう答えて見せた。呆れた顔の紫さんが視界に映る。というか家に帰らなくてもいいのだろうか？　それとも家が無いのだろうか。そういや魔理沙さんも昨日

は泊まっていったのだった。
……あの人が俺より年上だった事には驚いたなぁ。
「ま、もういいわ。今度は媚薬でも混ぜて無理やりでもその気にさせてあげるから」
色っぽい笑みを浮かべ、内股を撫でながらそんな事を言ってきやがった。全ての男を虜にしてしまうであろう程に魅惑的な笑みは、けれどしかし俺の心には届かない。
「やれるもんなら――やってみやがれ」
右端の唇を釣り上げてそう言ってやった。そして不服そうな紫さんを引き剥がして立ち上がり、部屋を出る為に襖を開ける――と、前の世界では絶対に拝むことさえ出来なかったであろう朝日が、宙に浮かんでいた。
――こちらもこちらで、魅惑的だ。
「そんじゃ紫さんは寝ててもいいですよ。俺はちょっくら境内でも散歩してきます」
「そう、分かったわ。後、神社の外に出たら駄目よ。死ぬから」
紫さんの目が細められた。
「死ぬ程聞きましたよ」
手をひらひらと舞わせながらそう言って、縁側を歩き出す。綺麗に整えられている境内には、しかしお賽銭が来る事が無いのだと、魔理沙さんが笑いながら言っていたのを思い出す。

――理由としては、来る途中に死んでしまう可能性があるからだそうで。下にある幻想郷唯一の人里には、残念ながら半妖と不死身しかここまで辿り着けるであろう人間は居ないらしい。話ながら霊夢さんが嘆いていたのが、記憶の片隅に残っていた。

「……しっかし、良い景色だよな」

まるで森林の中に居るかのような錯覚をさせてくれる程に、空気が美味しく、眺めが良い。さながら夏のじめっとした空気の中に舞い込んだ、冬の空気のようだ。

――と、いう事はいずれこの空気にも、この景色にも慣れてしまうのだろう。そうなってしまったら、もう俺は死ぬしかなくなる。死んで――この綺麗としか言い表せない世界を守る事しか出来なくなる。

「どうにもこうにも――呪いってのは、嫌だな」

当たり前だけど。

語尾にそう付け足して、縁側から境内におりた。そのまま賽銭箱のある場所へと向かっていく。おみくじとかは無いのか。綺麗でご利益がありそうな場所だから、妖怪さえ出なければそれなりに規模の大きい神社にはなるだろう。

霊夢さんの怠慢がこの神社――という訳だろうか？　などと考えて頭を振った。

怠慢をしている神社の巫女ならば、そこに紫さんが気に入る要素など無い。果たして強いからという理由だけで――紫さんが人を気に入るだろうか？　いいや、そんな事は無い。

つまり何かが――霊夢さんにはあるんだろう。紫さんでさえ目を輝かせてしまうような――何かが。果たしてそれは、何なのか。も

しかしたら、どうでもよくてくだらない事かもしれない。

まあ、そこに俺が立ち入る権利は無いのだろうけど。

「……で、さすがに俺もこんなお粗末な尾行は気が付きますって」

――そう言いながらくるりと背後を向いた。気配を隠そうともしない、足音さえ碌に隠さない、そんな尾行の主は――額の上あたりから、二本の角を生やしていた。

鬼、だ。

「――ん、さすがに気づくよねぇやっぱり」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら、幼い体躯で幼い顔をした『鬼』はそう言った。思わず、見つけたのは俺だというのに――ずりと一歩後ろに下がってしまった。退くはずの無い足を――退いてしまった。同時に後悔する。

つまりそれは――俺がこの『鬼』を恐れたという事だ。これで心理的な敗北は決定してしまう。嫌な汗が厚着をしている全身を包み込み始めた。こくりと生唾を飲み込んで、緊張を飲み込む。

「……でもなぁ。紫が気に入った男だからそれなりに強いかと思ったけど、――退いちゃうか」

にへらと、『鬼』は笑う。防ぎようのない本能的な恐怖が全身に逃走の指令を出した。それを抑えるように拳を力強く握り締めた。

『鬼』が、そこに目を付けた。

「――喧嘩、する？」

鳥肌が立った。
全身が震え上がる。
怖い――コイツは、恐い。
恐ろしい。

「――ッ、しま、せんよ。そんな事」

恐怖を押し殺すように声を出した。地の底から這いずり出てきたゾンビが発するような、割れたような低い声。解けるはずのない緊張が、全身を縛りつけ始めた。
落ち着け――まずは、落ち着くんだ。冷静になれ。大丈夫。死にはしない。考えろ、殺されはしないんだ。死なないって事は、生きれるって事だ。だから、生きれる。俺は生きれる。生還できる。殺されないで生きれる。下手に出るな。対等だ。鬼であろうと対等だ。いける。恐がる事は無い。今まで通り。通常でいい。

いつも通りに――声を出せばいい。それからだ。まずはスタート地点に立て。
決して下手になど――出ちゃいけない。

「へぇ、耐えるね。私相手に逃げないのは、外来人であろうと人間じゃ結構久しぶりだ。じゃ、次は――耐えられるかな？」

――瞬間、全身を吹き飛ばしてしまうかのようなナニカが『鬼』の身体から湧き出た。コイツは可愛い顔をしているが紛れも無い『鬼』なのだと、理解すると共に――脳味噌が急速に回転を始めた。
冷静になった脳味噌が、高速で動き出す。――つまりは、この『

鬼』も俺を試しているという事だ。俺がどの時点で弱音を吐き、降参するのか――試している。
紫さんと同様なのだ。

だったら――恐れるに足りない。全身を威圧し、毛穴の全てから進入してきそうな程のナニカだが――お試し。お遊びと同じだ。決して死なない――お遊びの粋に過ぎない。
だからこそ、先程退いた分の一歩を――踏み込んだ。砂埃が舞い上がる。けれどまだ足らない。

そしてもう一歩、踏み込む。

更に――踏み込む。

踏み込む。

「……凄い、ね」

「試されてるんだと分かったら――簡単ですからね」

呟く『鬼』にそう答えて、残り一歩で距離が無くなりそうな位置で足を止めた。
威圧をし続けても無駄だと感じたのか、『鬼』は威圧を消し止めた。ごうごうと脳内で鳴っていたノイズが鳴り止み、再び沈黙の朝が訪れた。
『鬼』は、数秒した後に口を開いた。

「――紫が気に入った訳が、分かった気がするね」

そう言って笑った『鬼』に

「嘘吐きを気に入る訳が俺には分かりませんが――ッぅう！」

そう言った瞬間――全てを飲み込むような狂人的な殺意が、全身を包み込んだ。全身がガタガタと震えだし、歯が鳴る。思考が止まり、本能的に一歩退いた。更に退く。

ありえない――脳味噌がそう告げた。そう、ありえない程の殺意と、殺気。

「――嘘吐き？　あんたは、嘘が好きなのか。少し気に入ったけど――見損なったよ」

――けれどそんな殺意を吹き消してしまうような怒気が胃の中から込み出てきた。

今、コイツは何といった？

「嘘が――好き？　――お前、そんなにぶちのめされてえのか」

視界がかっと光に包まれていく。怒気が視界を染めあげる。自然と拳が握られていた。退いた分、進む。鬼が目を見開いた。知るか、そんなもの。

とにかく今、俺は多分、いやきっと――怒っているのだろう。

冷静になる脳味噌と反比例するように――怒りが体を動かしていた。

そして鬼とほぼ零距離。

殴られれば即死は免れない位置まで来て――俺は口を開いた。

「嘘が好きな人間なんて――居るわけねえんだよ」

正に本当の――唸り声だった。

けれど怒りは収まらない。

「それでも俺は嘘を――吐かなきゃいけねえんだよ」

ただ、言った。

そしてただ、言う。

「お前にゃ絶対分かんねぇ。お前如きには――分かる訳ねえ」

言った。

言う。

「何かを守る為に――悪役になる奴ってのが居るって事、その全身で感じておけ。そして忘れるな。お前は絶対――俺が言った言葉の全てを忘れるな。

嘘吐きの――嘘吐きたる所以を、忘れるんじゃねえ」

一話　嘘吐きと正直者な鬼（後書き）

『やらなければいけない事』

二話　人里で不死身と

「……ところで萃香さん、俺は思うのですが、あなたが人里に来たら大変な事になるんじゃないでしょうかね？　しかもですよ、萃香さん。よく考えてください。鬼と一緒に歩いている外来人って、明らかに怪しいでしょ」

溜息を吐きながらそんな事を洩らすと、背後から盛大な溜息が聞こえた。……溜息に溜息で返すってどういう事だ。そんな事を思いながら後ろを振り返ると、遥か後ろに博霊神社が見えた。そして視界の端には萃香さんが呆れたように首を振りながら「やれやれ」と呟いていた。

その仕草に少々むっとしながらも、再び前を向いて歩く。太陽光を遮る葉を揺らがせている木々は、俺達を歓迎するかのように爽やかな風を吹かせていた。同時に夏がもうすぐ来る事を告げるように、むし暑い空気が漂い揺らいでいる。

「分かってないねぇ。害さえなさなければ人里には普通に出入り出来るんだよ」

ふと遅れて声が聞こえた。……そういえばここは不思議と未知に満ち溢れた世界だった。不思議に常識は通じず、未知に知識は通じない。つまり俺がどうこう考えた所で、この幻想郷という世界は理解出来ないのだ。

今更かもしれないが、鬼が存在している時点で常識も知識も通じない。そして鬼と仲良く歩いている俺も、常識も知識も通じない存在になってきているのだ。そう考えると何か『人間』という領域が侵食されている気がして、言い様も無い気持ち悪さが沸いてきた。

そんな気分に嫌気が差して、気を紛らわせるようにじっと遠くの方を見据える。と、遠くに木々の緑から開放された所があった。更に歩いて近づいていくと、そこに動く小さな点があった――人間だ。つまりあれは集落のような場所なのか。

どこかタイムスリップしたかのような違和感を抱きながらも後ろを振り返ると、萃香さんがとことこと付いてきていた。見た目は本当に幼女と変わらないというのに……やはり額の上部分から伸びるようにしている角が、彼女が鬼である事を告げている。

「……萃香さん、角触ってもいいですか」

「ん、角かぁ。別にいいけど――どうなるか知らないよ」

萃香さんの目が嫌らしく妖しいものへと変わった。幼い体から放出されているのは色っぽさだった。どうしこうも妖艶な人が多いのだろうか、幻想郷は。

「んじゃ遠慮しときますね」

「意気地なし」

悪いけどそこまで勇気は無いので。

そっと呟いて前を向き、歩いていく。その後何分かして、ついに人里に入り口に辿り着いた。人里の中に入って、久しぶりに砂を歩く。周りを見渡すと、子供の姿は見えずに大人や老人の姿がたくさんある。

とりあえず人里で食料を買わなければいけないのだが……どこがどんな所なのか把握出来なかった。というか人里自体がどういう所なのか把握できない。

萃香さんに助けを求めようとしたが、いつの間にかどこかへ消えていた。……逃げたのか、アイツ。だとしたら俺帰れねえじゃん。つかどうするよ。

パニックになりそうだった脳味噌をとりあえず沈めて、再び周りを見渡した。歩いてくる人々の視線が突き刺さるように集中した。よく考えれば学ラン姿なのだ。上のボタンを二つはずして、中に着ている黒のトレーナーを見えているようにしているが、異質な事には変わりない。外来人なのだと、ほぼ一目瞭然だろう。視線が集中するのも頷けた。

「……さてと、どうしようか」

萃香さんが戻ってくるまで待つという手もあるが、生憎人里の中央で突き刺さる視線を感じながら棒立ちになれる肝は持っていない。話しかけるという手もあるが、こんな視線が集中しているのに話しかける度胸も持っていない。

臆病者（チキン）は臆病者らしく、誰かの助けを待つべきだ。などと思いながら何も考えず人里に棒立ちしている。と、不意に肩を叩かれた。はっとして、遅れながら後ろを振り返った。

「お前、外来人だろ？　慧音の所に案内するからちょっと来なよ」

――まず目に入ったのがその紅い瞳だった。その後に白いプラチナのような髪が目に入り、整った顔立ちが目に入った。髪の中にあるリボンのような物とソプラノの声で女性だと理解すると共に、――どこか、異質なナニカ――人里の人間と同じでありながらも同じじゃないような、そんな物が感じられた。

だから一瞬ドギマギしながらも、「はい」と答えた。

「あー、でも慧音は今授業中か……。……腹減ってるか？」

ははは と、苦笑いを浮かべながらそう尋ねてきた。
とりあえずこちらも、慣れた偽りの笑み、俗にいう営業スマイルを見せ付けながら口を開く。

「ええ、まあ。博霊神社から来たんで」

とりあえずは、自分の境遇を話さなければ進まない。女性は少し驚いたような顔をした後に、目を細めて閉じかかっていた口を開いた。

「……外来人である事は間違い無いとして、へぇ、ここに来て何日目だ？」

「二日目です。紫さん、知ってますよね？　ええと、とりあえず紫さんに博霊神社へ送られて……昨日は霊夢さん魔理沙さん紫さんとで酒呑んでですね。まあちょこっと二日酔いなんですよねぇ……はは。そして今日は霊夢さんに頼まれて食料買いに来たんですよ」

身振り手振りでそう答えると、疑いの掛かった視線がするりと解けていった。どうやら三人の事は知っているらしい……いや、当たり前か。
霊夢さんや魔理沙さんは人間だから当たり前。そして紫さんは妖怪だがこの世界の管理人である。知らない方がおかしいのだ。そういえば賢者と呼ばれているんだっけ。

「お前は、それじゃあ一人でこの里に来たのか？」

――ゾクリと、した。一度はリボンを解くようにするりと抜けた警戒が――今度は鎖のように体へ巻きついてきた。何か、決定的な

どこかを見逃している気がした。
いや、けれど選択肢は残されているのだ。まだ質問があるという事は――と、考えて。

――馬鹿らしい。

俺は何も悪い事をしていないと言うのに、どうしてここまで恐れなければならない。身は潔癖なのだ。どこも悪い事などない。どうしてここまで深く追い詰められなければいけないのだ。
考えるなんて馬鹿らしい。自分は悪くない。悪くないのだ。自分を信じろ。他人に流されるな。

一番恐いのは、他人に流されて己を見逃す事だ。

「いえ、一人じゃないです。萃香さんと来ました。まあ鬼ですね」

あっけらかんとしてそう言うと、女性の息遣いが自然と暖かくなったのに気がついた。同時に鎖が狙いを外したかのように脇へ逸れた気がする。

「そうか、いやごめん。アイツ……紫は隙間に入れた人間は基本的に放任するからさ。そんな仲良くなったのが信じれなかったんだ。ホント、ごめん」

そう言って手を合わせながら謝る女性を見ながら、少し気楽そうな笑みを浮かべた。
そうして安心感を誘ってから――少しばかり、弄る。

「いえ、警戒されるのは慣れてますんで」

「……気づいてたのか」

ぴくりと頬を揺らした女性。

太陽の光が一層強く照りつけた。雲一つない空が視界に入る。にやりと笑ってやった。

「気配を読むのは――好きなんです」

「……負けたよ」

首を回しながらそう言って、女性は手を出した。右手を出して、その手を握る。

この世界に来て初めての握手は、どこか開放された気分になった。

「妹紅って呼んでくれ」

「仮名として、名無しと呼んでください」

けらけらと笑いながらそう言うと、妹紅さんも笑った。その後ひとしきり笑った後に、どこかの建物から子供達がわらわらと出てきた。その様子が蟻のようで、思わず笑ってしまう。

すると妹紅さんが誇らしげな笑みを浮かべながら、口を開いた。

「じゃ、どうする？　人里の守護者様に会うか？」

「ん、どうしましょうね。……とりあえずは、萃香さんが帰ってきたみたいなので、俺も帰る事にします」

前方に見えた背の低い少女を見ながら、そう言った。

「そうか、残念残念。慧音にお前を合わせたら面白い事になりそうだったのに」

にやにやとした笑みを浮かべる妹紅さんが視界の端に映った。
まったく嫌な性格してる。

「――例えばそれは、どんな事で」

「頭突き」

茶化したような質問に、大真面目で言ってきた。頭突きって……。
そんな誰にも聞こえない心の呟きを洩らしながら、ふぅと息を吐いた。
同時に遠くに見えていた萃香さんの姿がすぐそこまで来ていた。
片手を上げると、苦笑いをしながら萃香さんも片手を上げる。

「それじゃ妹紅さん、明日も来ますんで慧音さんとやらと会わせてくださいね」

「おっ、会うのか。凄い決意だな」

珍しく驚いたような表情を見せた妹紅さん。
だから再びにやりと笑う。

「頭突きを喰らわないでどこまで会話出来るか、試したいもので」

「ははははっ、面白いなお前。……それじゃ名無し、また明日」

『また明日』とは、何とも重い言葉な事で。

「はい、それではまた明日」

だから重い言葉で返してやった。

生きてたら、会いましょう。

二話　人里で不死身と（後書き）

日本人は流されやすい。
それが欠点。

『流されない芯』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1879z/

東方嘘吐記

2011年12月8日23時54分発行